

宗祖と守護神

中 條 暁 秀

(一) はじめに

宗祖の思想及び信仰の根底にあるものは法華經であることはいうまでもない。

その法華經には、諸尊が釈尊に対して法華經を守ると誓を立てている。ゆえに、諸尊は法華經を守護する責任がある。この関係からさらにその法華經を信じて拜む人を守る責任が生まれる。つまり、法華經それ自身の説くところにしたがえば、

序品 二界八番衆

法師品「如来則為。以衣覆之。又為他方。現在諸仏。之所護念。」

宝塔品「於我滅後 誰能受持 読誦此經 今於仏前 自説誓言」

安樂行品「諸天昼夜。常為法故。而衛護之。」

嘱累品「如世尊勅。当具奉行。」

陀羅尼品「汝等但能。擁護受持法華名者。福不可量。」

勧発品「濁惡世中。其有受持。是經典者。我当守護。除其衰患。令得安穩。」

のごとくである。

しかし、この中で特に釈尊の命を奉じて守護を誓った約言に該当する文は、贗果品の「如世尊勅。当具奉行。」⁽¹⁾である。この文は守護する当面の対象は法華經そのものであるとしているが、宗祖はその守護力をそれに止まらず、さらに法華經を信じ行ずる者の上にまで進展普及をさせ、その守護を受くべき有資格者は法華經の行者であるとするのである。

(二) 宗祖と守護神

守護とは、法・人・国等を守ることである。⁽²⁾したがって、法・人・国の守護を仏前において誓願する諸尊を指して守護神というのである。⁽³⁾

当然のごとく宗祖にしてみれば、法とは法華經を、人とは法華經の行者を、国とは法華經の行者の居住する国（日本）を指している。

それならば、宗祖は具体的にはいかなる諸尊を守護神として捉えられたのであろうか。⁽⁴⁾

宗祖は安國論御勘由來に、

日蓮所^レ持^ル法華經守護^ノ十羅刹^ヲ治罰蒙^ル之。⁽⁵⁾

と、開目抄には、

法華經の諸仏・菩薩・十羅刹、日蓮を守護し給^ハ上、淨土宗の六方諸仏・二十五菩薩、真言宗の千二百等、七宗の諸尊・守護善神、日蓮を守護し給^ハべし。⁽⁶⁾

と、清澄寺大衆中には、

地涌千界・文殊・観音・梵天・帝釈・日・月・四天・十羅刹、法華経の行者を守護し給はんと説^カれたり。⁽⁷⁾
と、檀越某御返事には、

天照太神・正八幡・日月・帝釈・梵天等の仏前の御ちかい、今度心み候は⁽⁸⁾や。

と述べられている。右にあげた遺文はほんの一例にすぎないのであるが、しかし、そこには守護神の具体名が記されている。これにならって、さらに遺文全体より守護神を抽出すると、表(一)のようになる。

表(一)

梵天王 帝釈天 八幡大菩薩 日天 月天 諸天 十羅刹女	守護神名						引用回数	遺文 (数字は定本遺文番号) 肩の数字は同一遺文における引用回数である。
	12	12	13	13	14	14		
	49	98	98	98	98	107	107	
	98	101	181 ²	181 ²	168	181 ²	181 ²	
	113	113	205	205	176	205	205	
	124	173	220	220	213	220	220	
	174	175	260	260	242	247	247	
	205	245	283	283	247	283	283	
	247	262	288	288	283	288	288	
	262	266	294	294	288	294	294	
	276	293	327	327	343	327	327	
	293	314	343	343	395 ⁴	343	343	
	318	321	388	388	408	346	346	
	364	333	395	395		388	388	
						395	395	

同	地	觀	二	山	文	諸	二	二	多	地	釈	諸	四	天
名			乘			菩			宝	涌 の 菩	迦		天	照 太
神	神	音	界	王	殊	薩	天	聖	仏	薩	仏	仏	王	神
1	2	2	2	2	3	4	4	4	6	6	8	8	10	10
160	175	205	113	98	118	92	113	113	106	106	106	70	107	98
	181	388	388	168	205	98	124	124	107	107	107	98	181	168
					388	113	247	247	247	118	181	106	205	176
						388	293	293	276	181	247	107	220	213
									346	205	276	181	247	242
									388	247	295	247	288	247
											346	346	294	283
											388	388	343	288
													388	343
													395	408

つまり、宗祖のいう守護神とは多種の神名を数えることができることが、その最大の特徴であるといえる。(9)そして

天神 地祇	地 祇	星 宿	大小の 神祇	法華 經	鬼子 母神	迹化 他方	八 部	七宗の 諸尊	真言宗の千二百等	淨土宗の六方の諸 仏二十五の菩薩	天神	彌勒	同生 神
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
170	388	388	327	262	247	247	113	98	98	98	175	388	160

表(Ⅰ)によっても明白な通り、宗祖のいう守護神は二つに大別される。一つは仏教における神で、仏教とその信奉者を守護する善神一般を指し、法華經の行者の守護を誓った十羅刹女・梵天・帝釈・日月等を挙げることができ、いずれも仏教に付屬する神である。二つは仏教固有の善神に対する日本固有の神で、なかでも天照・八幡の二神を重要視している点である。

しかしながら、このような数多の諸尊に対して祈請することは、あまりにも煩瑣であり、しかも誤解をまねく恐れがあるから、当然そこには要約・統合という表現形式をもつようになるのは、自然の成り行きのように思えるのである。立正大学の宮崎英修先生は、『日蓮宗の守護神』⁽¹⁰⁾の中で、その要約・統合過程を指摘されているのであるが、結局のところ多種である守護神は、「法華經の諸仏・菩薩」乃至「釈迦仏・多宝仏」に統合され、「法華經」という語で表現されるようになる。しかし、これは単に經卷というのではなく、諸仏の師たる法、そして、これを説いた久遠本仏、すなわち、寿量品の仏によって統轄される法華經の諸仏・菩薩を内包しているということである。⁽¹¹⁾

第二に注目すべきことは、宗祖が守護神の機能をどのように考えたかである。宗祖の遺文は論構成の基礎となるものであるから、繁を厭わず、その機能を分類し結論を導きたい。⁽¹³⁾

今、表(Ⅰ)に示される引用回数が多い梵天王を例にして考察すると表(Ⅱ)となる。

表(Ⅱ) 〆梵天王〱

機 能	遺 文 (数字は定遺の頁数)
(イ)守護する	日妙聖人御書(六四七) 〆真〱 撰時抄(二〇四六) 〆真〱

<p>(1) 法華経の行者を守護する</p>	<p>清澄寺大衆中（一一三六）△會▽ 四糸金吾釈迦仏供養事（一一八四）△真・會▽ 窪尼御前御返事（一五〇三）△真▽ 富木入道殿御返事（一五一九）△真▽ 日眼女釈迦仏供養事（一二二四）△會▽ 聖人御難事（一六七四）△真▽ 上野殿母尼御前御返事（一二一三）△真▽ 諫曉八幡抄（一八四九）△真・會▽</p>
<p>(2) 日本は謗法国であるから捨国をする</p>	<p>(ロ) 仏前の誓願があるから守護する</p> <p>下山御消息（一三三二）△真・日法・日澄写本▽ 檀越某御返事（一四九三）△真▽ 変毒為藥御書（一六八三）△日興写本▽ 四信五品抄（一二九九）△真▽ 下山御消息（一三二五・一三二九）△真・日法・日澄写本▽</p>
<p>(イ) 謗法者を処罰する</p> <p>(3) 謗法者を処罰する</p> <p>(ハ) 仏前の誓願があるから処罰する</p>	<p>神国王御書（八八六・八九〇）△真▽ 王舎城事（九一七）△會▽ 富木入道殿御返事（一二一九）△真▽ 随意御書（一六一七・一六一八）△真▽ 種々御振舞御書（九八四）△會▽ 高橋入道殿御返事（一〇八六）△真▽ 千日尼御前御返事（一五四四）△真▽</p>

<p>(4) 隣国の聖人に仰せ付けて、又、隣国の賢王の身に入つて謗法国（日本）を逼責する（他国侵逼難）</p>	<p>法門可被中様之事（四五四）△真▽ 聖人知三世事（八四三）△真▽ 種々御振舞御書（九六一）△會▽ 一谷入道御書（九九六）△真▽ 撰時抄（一〇〇七）八・一〇五五△真・會▽ 三三藏祈雨事（一〇七一）△真▽ 清澄寺大衆中（一一三四）△會▽ 報恩抄（一二三四）△真・會・日舜・日乾写本▽ 現世無間御書（一二九二）△真▽ 下山御消息（一三四二）三△真・日法・日澄写本▽ 日女御前御返事（一五一一）△真▽</p>
<p>(4) 自界叛逆難の並記</p> <p>(4) 仏前の誓願があるから謗法国を逼責する</p> <p>(4) (1) と反対の表現方法である</p>	<p>種々御振舞御書（九六三）△會▽ 撰時抄（一〇四七）△真・會▽ 下山御消息（一二三五）△真・日法・日澄写本▽ 滝泉寺申状（一六七八）△真▽</p>
<p>(5) 行者守護を違約すると無間大城に墜ちる</p>	<p>神國王御書（八九三）△真▽ 光日房御書（一一五四）△會▽ 聖人御難事（一六七三）△真▽ 諫曉八幡抄（一八三五）△真・會▽</p>

(6) 末法になると守護力が弱くなる

富木殿御返事（六一九）△真▽
真言諸宗違目（六四〇）△真▽

(7) 謗法者にとって大怨敵となる

下山御消息（一三四二）△真・日法・日澄写本▽
慈覚大師事（一七四二）△真▽

宗祖の遺文の随所に説示される通り、実に多様な機能を有していることを梵天王という一つの守護神を例にしてもそのことを知り得るのであるが、その主たる機能は、あくまでも「法華経の守護者」と見られていることは言うまでもない。⁽¹⁴⁾

(三) 善神捨国論

宗祖は三十二才で房州清澄寺で題目を始唱して後、鎌倉に出て法華経の独妙を主張して、諸宗を否定し続けたために、常に杖木瓦石・悪口罵詈を蒙ったが、特に立正安国論献上後の迫害は甚だしく、開目抄によれば、

既に二十余年が間此法門を申に、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに我身命に及^す。其上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聴問の俗人など来て重科に行る。謀反などの者のごとし。⁽¹⁵⁾

と述懐されている。

今少し具体的に述べるならば、王難とは伊豆・佐渡の流罪で、他は私難である。しかし、宗祖にとってより危険が多かったのは王難よりむしろ私難であったと思われる。それは建長五年四月の清澄寺追放にはじまり、文応元年八月

の松葉ヶ谷草庵の夜打、文永元年十一月の東条の松原の急襲、同八年九月鎌倉草庵での召取りの際、法華經第五の卷を持って大衆の面前で少輔房に加えられた打擲⁽¹⁶⁾。表面は遠流と見せかけ実は斬首と決め、鎌倉中を裸馬に乗せて引き廻し、夜陰に乗じて罪人の処刑場である片瀬竜ノ口へ引つ立て、断首寸前に辛くも一命が助かった件。佐渡配流中たびたびの偽の御教書の発布のごとき、これらの私難の中でも竜ノ口の頸の座と東条の難には過ぎずと洩らされたときえ伝えられている⁽¹⁹⁾。この他の私難にしても決して軽からぬ法難であつたと拝察されるのである⁽²⁰⁾。

翻つて、伊豆流罪について宗祖は、金吾殿御返事に、

法華經のゆへに流罪に及ぬ。今死罪に行れぬこそ本意ならず候へ。あわれさる事の出来し候へかしとこそはげみ候て、方々に強言をかきて拳^ヅをき候なり。すでに年五十に及びぬ。余命いくばくならず。いたづらに広野にすてん身⁽²¹⁾を。

と、この身を法華經弘通のためにささげんと誓われ、流罪二度目の佐渡については、開目抄に、

而に法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此国に生ずは、ほとをど(殆)世尊は大妄語の人、八十万億那由陀の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ぬべし。……(中略)……

日蓮法華經のゆへに度々ながされずは数々の二字いかんがせん。此二字は天台伝教⁽²²⁾いまだよみ給はず。況余人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。

とまで切言されたことで、宗祖が法華經弘通のためにこのような値難を経てこそはじめて、法華經弘通が完全に釈尊の御意に符契したとして、従来⁽²³⁾の単なる持經者ではなく、まさしく法華經の行者であるとの確信を抱かれたに相違ないのである。

ところで、配流地佐渡においてもやはり宗祖は生命の危機にさらされていたのである。宗祖の斬首が最も強く予想されたのは文永九年の初頭の頃と推察されるが、結局のところ宗祖の首をつなぎとめたのは何であつたであろうか。結論を先にいえば、それは予言（自界叛逆難と他国侵逼難）の的中にあつたと考えられる。まず自界叛逆難は文永九年一月の本間重連に対する予言が二月中旬に的中して事実となつて現われ、また高麗の使者が四回目の大元蒙古の国書を携えて来たのはそれから程ない五月のことである。他国侵逼難は早や目前に迫つて来たという現実である。約言すれば、佐渡配流初めの文永九年頃の宗祖の生命の危機を廻避し得た理由は、およそそのような点にあると推定できるのである。

かかる内憂外患の原因を宗祖は、

國中守護諸大善神不_レ飢_ハ法味_ヲ失_ヒ威光_ヲ捨_テ国土_ヲ去_リ了_ス。惡鬼得_テ便_ニ至_リ災難_ニ。結句自_リ他国_ニ可_レ破_ル此国_ヲ先相所_レ勸_ム也。⁽²⁸⁾

と、すなわち、外ならぬ國中を守護する諸天善神が正法である法華經の法味を嘗めずして威光を失い、国を捨て去つた際に惡鬼が便りを得て内外の災難が生じると説示される、いわゆる善神捨国論に求めたことである。

ここで本来ならば直ちに論の展開を試みなければならぬのであろうが、その前に検討すべき問題がある。それは善神捨国の理由としての謗法罪ということについてである。

末法思想・凡夫の自覚・罪業意識は、鎌倉時代の思想界の通念であつて、それを最も鮮明にあらわしたものは浄土教（念仏）である。その念仏の克服に向かわれた宗祖の思想は、当然のごとくこの問題と関連を持ってくるのである。法然・親鸞の思想は「罪惡深重、煩惱熾盛」なる自己の姿をあらさまに深信することから出発するのに対し、

宗祖の場合は甚だ特異なことに末法・凡夫の本質を「謗法」として捉えられたことである。

「謗法」、すなわち、正法を誹謗するという意識は、法華経が最も正統な仏教でなければならぬという宗祖の教相的認識から導かれたものである。浄土教の流行をはじめ諸宗乱立の様相を呈している鎌倉仏教の現状を宗祖は、末法闡淨堅固のしるしと考え、当時の多くの人々が法華経を信奉せず、かえって誹謗を加えている事実に着目され、法然などを「謗法の人」とし、わが国を「謗法の国」と断じられたのである。⁽³²⁾

この謗法の人を末世の機根とし、この救済とかかる意識の克服をめざして宗祖は布教に邁進されたのであるが、これを大別すると二つの方向がある。第一は、謗法者の代表は念仏であるという客観的認識に基づいて、それと対決し克服することであり、第二は、謗法の意識を自己の負われた罪業から発するものとし、内面的精神においてその克服をめざしたことである。⁽³³⁾

まず第一の問題から考察する。なぜなら、このことを論ずることが延いては善神捨国論を述べることになるからである。なお、第二の問題は紙数の都合で省略する。⁽³⁴⁾

末法の世相を痛感し、濁悪謗法の邪惡に憤激してこれの克服を以て開宗の使命とした宗教者は、宗祖以外には居られない。実に宗祖の宗旨は、末法の克服をその開宗の基礎としてしていることである。源空・親鸞の両者の宗旨も末法を教学の基礎としている点においては同一であるが、逃避的にこれを処理しているのに対し、宗祖は末法のただ中に突撃して、これを克服せんとした態度の相違からも正反の度を異にすることが窺われるのである。⁽³⁵⁾要するに、宗祖は法華の正法を末法に建立して、末法の五濁謗法を克服は正しようとするところにあったと考えられるのである。

宗祖にとって、末法の世においては謗法罪が跡を絶たないという仏教的・社会的現実を見逃すことは絶対にできな

い。それならば、かかる謗法罪を一体どのように処理していけばいいのであろうか。

宗祖は、軽罪の場合には、日・月・四天・梵天・帝釈が行う謗法治罰の顯現として、天災地変（地震）・疫病等が挙げられるが、重罪に及んでは、武力の直接行使（蒙古襲来）もやむを得ないというふうに、謗法罪の懲罰の仕方を捉えられていることである。⁽³⁶⁾

そして、謗法罪に対する罰には、

罰は惣罰・別罰・顯罰・冥罰、四候。日本国の大疫病と大けち（飢渴）とどしうち（同土討）と他国よりせめらるるは惣ばち（罰）なり。やくびやう（疫病）は冥罰なり。太田等は顯罰なり。別ばちなり。⁽³⁷⁾

と述べられるように四種類があり、その罰に対する懲罰の仕方も四条金吾殿御返事によれば、

但諸天等の御心不^ふ叶^へ者、一往は天変地天等をもちてこれをいさむ。事過分すれば諸天善神等其国土を捨離し給⁷。

若は此大王の戒力つき、期来て国土のはろぶる事もあり。又逆罪多にかさなれば隣国に破らるる事もあり。⁽³⁸⁾
と、段階的に三つに区分されている。すなわち、

(a) 天変地天

(b) 善神捨国

(c) 隣国に破らる

の三段階的な懲罰方法を説示されている。順次考察すべきところであるが、⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾ (a)・(b)は紙数が許されないので省いて、(c)について少しく検討してみることにする。それでは(c)の隣国に破らるとは、具体的には何を意味し、いかなる意義を有しているのであろうか。これに該当する遺文を掲げると二つの系統に整理される。

(イ) 自界叛逆難と他国侵逼難とが並記される。⁽⁴¹⁾

法蓮鈔には、

法華經を弘通する行者を王臣人民怨^ム之間法華經の座にて守護せんと誓^ヒをなせる地神いかりをなして身をふるひ、天神身より光を出て此国をおどす。いかに諫むれども用^ヒざれば、結句は人の身に入て自界叛逆せしめ、他国より責^ムべし。⁽⁴²⁾

と、種々御振舞御書には、

梵天・帝釈・日月・四天の御とがめありて、遠流死罪の後、百日・一年・三年・七年が内に自界叛逆難とて此御一門⁽⁴³⁾のうち(同士打)はじまるべし。其後は他国侵逼難とて四方より、ことには西方よりせめられさせ給^ハべし。⁽⁴⁴⁾⁽⁴⁵⁾と示し、他には神国王御書と撰時抄がある。

(ロ) 特に他国侵逼難を強調している。

法門可被申様之事に、

日本一州上下万人一人もなく謗法なれば、大梵天王・帝釈並^ニ天照大神等隣国の聖人に仰^ツつけられて謗法をためさんとせらるるか。⁽⁴⁶⁾

と、報恩抄には、

正法を行ずるものを国主あだみ、邪法を行ずる者のかたうとせば、大梵天王・帝釈・日月・四天等、隣国の賢王の身に入^リかわりて其国をせむべしとみゆ。⁽⁴⁷⁾⁽⁴⁸⁾と述べ、同様の遺文は一〇例を数える。

結局のところ、五濁謗法充滿の悪国である日本に対しての蒙古軍の来襲は、教主釈尊から派遣された懲罰を目的とした軍神であるとの認識で、宗祖は把握されたに違いないのである。

ところで、さらに一步踏み込んでこの蒙古問題に対する宗祖の胸中を拝すると、蒙古来襲は、他国侵逼難に対する宗祖の予言的の中を意味するものであって、宗祖に信服する門弟たちはむしろ喜びと思うであろうと、妙一尼御返事に、

又いゝし事むなしからずして、大蒙古国もよせて、国土もあやをしげになりて候へば、いかに悦給はん。(49)と述べられている。

もちろん、宗祖は日本に生を受け、そして、その縁を思い、生国を愛する心は人一倍である。この生国日本に対する愛情から以てすれば、蒙古によって日本が滅されることは宗祖にとって非常なる悲しみであることは言を待たないところである。このような意味からすれば、蒙古来襲を宗祖が喜ぶというようなことはいわれなきことであると、南条殿御返事に、

又むくり(蒙古)のをこれるよし、これにはいまだうけ給らず。これを申せば、日蓮房はむくり国のわたるといへばよろこぶと申。(50)これゆわれなき事なり。とことわっていることをみても明らかである。

宗祖にとってみれば、蒙古来襲は謗国日本への警鐘乱打のためであって、喜びどころか、宗祖の真意は開目抄に、

我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず。(51)

といわれるような大慈大悲の心で既述のような表現をされたと思うのであるが、あくまでも、宗祖の心底にあるものは生国日本への慈悲心である。そこに宗祖の宗教者としての真面目があるように思うのである。

(四) 地涌の菩薩と守護神

宗祖の守護神に対する基本姿勢は、守護神が法華経とその行者を、そして、日本国の守護を遂行することにある。

宗祖は諫曉八幡抄に、

南無妙法蓮華経と申人^スをば大梵天・帝釈・日月・四天等昼夜に守護すべしと見えたり。⁽⁵²⁾

と、神国王御書には、

第一天照太神・第二八幡大菩薩・第三は山王等の三千余社。昼夜に我国をまほり、朝夕に国家を見そなわし給。⁽⁵³⁾
と述べられることによって明白である。

しかしながら、もし守護を放棄するようなことがあれば、

法華経守護の梵釈・日月・四天等さのみ守護せずば、仏前の御誓^ヒむなしくて、無間大城に墜^ツべし。⁽⁵⁴⁾
と示されるように、その威力を失い、三惡道に墮ちるであろうとの警告を発するのである。

ところが、その警告を無視する結果に至るのである。それは、すでに述べたように念仏・禅等の邪法・惡法が法華の正法を覆い隠し、守護神は法味を嘗めることができないため威力を失い、天に昇り、濁惡の大難の激しさゆえにおじけずき、守護を放棄するというのである。下山御消息に、

此三の大惡法鼻を並^へて一國に出現せしが故に、此國すでに梵^ん天・日月・四王に捨^れられ奉り、守護^し善神も還^へて大怨敵とならせ給^ふ。⁽⁵⁵⁾

と、開目抄に、

仏前の誓はありしかども、濁世の大難のはげしさをみて諸天下給^づざるか。日月天にまします。須弥山いまもくづれず。⁽⁵⁶⁾

と言われることによって明らかである。

とすれば、このような濁惡謗法の邪惡に満ちた日本において、その救済は一体どうすればいいのであろうか。かかる疑問に対して宗祖は、新しき法と新しい弘通者に求められたのである。具体的に言えば、それは上行等の地涌の菩薩が濁惡謗法の末法に応現して、良藥である妙法の五字を末代幼稚の衆生に服せしむことによってのみ、その救済は可能となるのである。つまり、宗祖は自身の思想・信行・教法・宗旨の一切を根本的に宣明した最重要遺文の觀心本尊抄に、

今末法初^レ以^レ小打^レ大^レ以^レ權破^レ実^レ東西共失^レ之^レ末天地顛倒^ニ迹化^ニ四依隱不^ニ現前^一。諸天棄^ニ其國^一不^レ守^ニ護^ニ之^一。此時地涌菩薩始出^ニ現世^一但以^ニ妙法蓮華經^一五字^ニ令^レ服^ニ幼稚^一。因謗墮惡必因得益是也。⁽⁵⁷⁾

と述べられることによって明瞭である。再言すれば、宗祖は末法という善神捨國の日本に地涌の菩薩（本化弘通者）が出現して、法華經の真髓たる五字の要法（本門の題目）を必ず弘めるというのである。

しからば、正法が弘まれば守護神はどのような態度をとるのであろうか。宗祖は法門可被申様之事に、
經文のごとくならば仏神日本國にまします。かれを請^ままいらせんと術はおぼろけならでは叶^はがたし。先世間の

上下万人云、八幡大菩薩は正直の頂にやどり給、別のすみかなし等云云。世間に正直の人なければ大菩薩のすみかまします。又仏法の中に法華經計こそ正直の御經にてはをします。法華經の行者なければ大菩薩の御すみかをはせざるか。但日本国にては日蓮一人計こそ世間・出世正直の者にては候へ。(58)

と、日本国の諸神の中で八幡大菩薩を以てその代表とし、その八幡も住むところがないから天に昇ってしまったのである。しかし、正法の弘まるのを見れば、当然その弘通者のところへ還帰するといふのである。さらに、宗祖が文永八年九月十二日竜ノ口へ赴く途中、鶴ヶ岡八幡宮の前で、

八幡大菩薩に最後に申べき事あり、とて馬よりさしをりて高声に申やう。いかに八幡大菩薩はまことの神か。(60)

と叱咤した、いわゆる八幡社頭諫言である。これなども八幡大菩薩の在社を確信していたゆえの発言であらうと思われる。のち、弘安三年十一月十四日に社殿を焼失した八幡に対して、

此大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給とも、法華經の行者日本国に有ならば其所に栖給べし。法華經の第五云、諸天昼夜常為法故而衛護之文。(62)

と、救世の大導師が出て、法華經の正法を弘めるならば、必ずや来下して守護するであらうことを宗祖は堅く信じ疑わなかったのである。

(五) 本仏と守護神

法華經二十八品中安樂行品までの前半十四品を迹門、涌出品以下勸発品に至る後半十四品を本門と称している。迹門とは久成の本仏が衆生教化のために、化迹を伽耶城に垂れて説かれた法門をいい、本門とは仏が開迹顯本、つまり

伽耶城の迹を払い、五百塵点劫の久遠実成の本地を明かし、久成正覚の本仏なりと開顯しての說法であるから本門と
いうのである。ゆえに宗祖は開目抄に、

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説て爾前二種の失一を脱たり。しかりといえどもいまだ発迹顯本せざれば、
まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにた
り。本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前
迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顯す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し
仏界も無始の九界に備て、真十界互具・百界千如・一念三千なるべし。⁽⁶³⁾
と述べられることよつて明瞭である。

それならば、宗祖は本仏と守護神の關係をどのように理解されたのであろうか。
法華經の寿量品に、

我常在此。娑婆世界。說法教化。亦於余処。百千萬億。那由陀。阿僧祇國。導利衆生。⁽⁶⁴⁾

と、同品偈頌に、

常在靈鷲山。及余諸住処。⁽⁶⁵⁾

と、同じ内容を意味するものである。すなわち、本門寿量の本仏は、常住不滅で靈山淨土に在つて說法しているが、
衆生を導利せんがために、如来秘密神通之力を以て自由自在に、いかなる国土利土たりといえども応現垂迹して法を
説き、悉く衆生を教化し、無上道に入らしめ、速かに仏身を成就することを得せしめんとするのである。

次に、本仏はいかなる衆生教化方法を用いるのであろうか。端的にいえば、仏の妙用のことについてである。

寿量品によると、

諸善男子。如來所演經典。皆為度脫衆生。或説己身。或説他身。或示己身。或示他身。或示己事。或示他事。諸所言説。皆實不虛。⁽⁶⁶⁾

と説かれている。そして、宗祖はこの寿量品の文を引用されて、日眼女釈迦仏供養事に、

法華經、寿量品云、或説己身、或説他身、等云云。東方の善徳仏・中央の大日如來・十方の諸仏・過去の七仏・三世の諸仏、上行菩薩等、文殊師利・舍利弗等、大梵天王・第六天の魔王・釈提桓因王・日天・月天・明星天・北斗七星・二十八宿・五星・七星・八万四千の無量の諸星、阿脩羅王・天神・地神・山神・海神・宅神・里神・一切世間の国々の主とある人、何れか教主釈尊ならざる。天照太神・八幡大菩薩も其本地は教主釈尊也。⁽⁶⁷⁾

と、つまり、本有常住の覚者の公表以後における釈迦を以て本地の釈尊とし、その他の諸尊のことごとくは、この本仏からそれぞれの地位や能力を持った各種の諸尊の名を以て、諸処に垂現したものに外ならぬとするのである。

再言すれば、一切世間の現象は悉く本仏の妙用の表われにすぎないのであって、梵天王・帝釈天と、あるいはまた天照太神・八幡大菩薩と現われたのも、衆生救済・皆令入仏道の大悲本願の久成本仏の妙用の表現である。

この本仏の働きは、久遠無始以来未来永劫に一貫して寸時間断なく継続されるのである。この間隙なき本仏の活動を寿量品には、

所作仏事。未曾暫廢。⁽⁶⁸⁾

と記されている。

仏寿の無量なるとともに、また本仏の化現も無量である。或示己身或示他事等の文こそ実に、法華經の包容的性格

を説いたものといひ得る根拠である。常在靈山隨時隨機に化現し、無限に衆生教化の化用を示すところの久遠実成の
釈尊こそ森羅万象の本体である。そして、如来秘密の神通力が本仏妙用の原動力なのである。

したがって、宗祖がいう諸仏・諸菩薩・梵天・帝釈等の三十有余の守護神のことごとくは、すべて本仏に包摂されて
いるのである。つまるところ、本仏と守護神の關係は、寿量品における本仏の妙用を論ずることにあるといえるの
である。

六　む　す　び

以上甚だ簡単で、いわねばならぬこともいわずじまいに終った点も多いと思うが、むすびとしていうならば、宗祖
にとって命とたのんだものは、釈尊の力であるところの法華經である。この法華經には、守護神が釈尊に対して法華
經を守るとの誓を立てている。であるから、守護神は法華經を守らねばならぬ責任がある。この關係からさらに、そ
の法華經を信じ行ずる者を守る責任がある。宗祖はその法華經の文に指示してある通りに色説されたのであるが、そ
れにもかかわらず、次々に法難にあい、どうみても守護を受けているとはいひがたいのである。してみると、宗祖は
果して本当に法華經の行者であらうかという疑問が湧いてくるのも当然である。かかる疑義に対して宗祖は、自分が
さまざまな法難にあうのは前世における法華誹謗のゆえで、その罪は極めて重く深く沈んでいる。けれども、法華經
の力は強大で、深底にある重い罪も遂には浮上し、今法難という形で現われたものに外ならない。これによって、そ
の罪が清算されたものと拝すべきで、決して守護神の守護がなかったわけではない。であるから、あのような法難を
まぬがれたという事実が、そのよき証左であらうと思うのである。もし、守護神が法華經の行者を守護する誓約を實

行しなかったとすれば、どうして一命を取り止め得たであろうか。宗祖としては、法難から自分を救ってくれたものは、守護神の本源である釈尊の力の法華経が、ある時には梵天・帝釈となり、日・月天子となり、十羅刹女と変化して現われた靈験であると考えられたと思うのである。

〔註〕

- (1) 岩波法華経下一六八。なお、祈禱鈔(定遺六七六)△曾▽・神国王御書(定遺八九二)△真▽・種々振舞御書(定遺九六九)△曾▽参照。
- (2) 法華辞典(五三二)参照。小学館日本国語大辞典、岩波広辞苑、諸橋大漢和辞典、望月仏教大辞典等もほぼ同じ内容である。
- (3) (2)でいう辞典類もただ守護する神という説明で詳細な記述はない。
- (4) 守護神という語は開目抄(定遺六〇一)△曾▽・南条殿御返事(定遺一〇八〇)△真▽に往見される。なお、それに類似する「守護の善神」・「善神」・「諸天善神」・「國中の善神」・「日本国守護の善神」という表現の仕方が圧倒的に多い。
- (5) 定遺四二四△真▽
- (6) 同五八一△曾▽
- (7) 同一一三五―一二三六△曾▽
- (8) 同四九三△真▽
- (9) 遺文には膨大な諸尊が記されているが、(5)・(6)・(7)・(8)で説示されるような範囲のものとする。なお、表(一)を眺める時、遺文番号の同一のものが、各守護神にわたってある。このことは宗祖の守護神の用い方に一定の型があることを知り得る。ちなみにその型及び遺文における引用回数を記すと左のようになる。

型	引用回数
梵天・帝釈	19
梵天・帝釈・四天	6
梵天・帝釈・日天・月天	5
梵天・帝釈・日天・月天・四天王	36
梵天・帝釈・日天・月天・四天王・天照太神・八幡大菩薩	3

(10) 五一二参照。なお、岩波日蓮文集(三五二―三五三)も参照されたい。

(11) 崇峻天皇御書(定遺一三九四)△會▽

(12) 性格・活動・働き・能力等の語彙があるが、この場合機能という語が最もふさわしいように思う。

(13) 本来ならば引用回数が多い梵天・帝釈・日天・月天・四天・十羅刹女・天照太神・八幡大菩薩のそれぞれにスポットを当てて、解明をしなければならぬであろうが、紙数の都合で梵天を以てその代表とする。なお、引用回数の大小が必ずしも重要度を左右するとはいえないが、しかし、その多少が宗祖の宗教感情認識のパロメーターであると考えても差支えないと思う。

(14) 他の守護神もほぼ表(Ⅱ)で示すような機能を有している。

(15) 定遺五五七△會▽

(16) 種々御振舞御書(定遺九六四)△會▽撰時抄(定遺一〇五五)△真▽

(17) 下山御消息(定遺一三三二)△真・日法・日澄写本▽

(18) 法華行者値難事(定遺七九八)△真▽・窪尼御前御返事(定遺一五〇三)△真▽・千日尼御前御返事(定遺一五四五)△真▽

(19) 上野殿御返事(定遺一六三二)

(20) 影山堯雄氏『日蓮宗布教の研究』(二六―一七)参照。

(21) 定遺四五九△真・日澄写本▽

(22) 同五五九△六〇〇△會▽

(23) 南条兵衛七郎殿御書(定遺三二七)△真・日興写本▽、拙稿「不軽と上行」(七一―七三『棲神四九号』)を参照されたい。

(24) 富木殿御返事(定遺六一九)△真▽、影山堯雄氏前掲著(二六―三〇)を参照されたい。

(25) 種々御振舞御書(定遺九七四―九七六)△會▽、高木豊氏『日蓮とその門弟』(二七八―二八二)を参照されたい。

(26) 歴史学研究会編『日本史年表』(九八)

(27) 高木豊氏前掲著(二七一―二七八)を参照されたい。

(28) 安国論御助由來(定遺四二二)△真▽

(29) 宮崎英修氏『日蓮宗の守護神』(八六―九〇)・『不受不施派の源流と展開』(九五―九八)を参照されたい。なお、日蓮宗では古来よりこの善神捨國論のことを神天上法門といい、その根拠となるものは立正安国論(定遺二〇九―二一〇・二二三)△真▽である。また、この思想の背景となる典拠は、金光明經(大正藏經一六卷四二九―四三〇)・大集經(大正藏經二三卷三七九)・仁王經(大正藏經八卷八三三)等である。

- (30) 岩波歟異抄三六
- (31) 法然上人全集(往生大要鈔五七)
- (32) 浅井内道氏「法然房源空と宗祖日蓮」(九九〜一二三『法華文化研究第三号』所収)を参照されたい。
- (33) 勝呂信静氏「日蓮思想の根本問題」(九三〜一二六)、岩波日本思想大系『日蓮』の補注(謗法)を参照されたい。
- (34) (23)の拙稿を参照されたい。
- (35) 望月敏厚氏「日蓮教学の研究」(六六)参照。
- (36) 佐々木錦氏「日蓮の思想構造」(四二『日蓮とその教団第一集』所収)
- (37) 聖人御難事(定遺一六七三)△真▽
- (38) 定遺六六一△日興写本▽
- (39) 安国論副状(定遺四二二)△會▽・安国論御勅由來(定遺四二二)△真▽・新尼御前御返事(定遺八六七)△會▽・富木入道殿御返事(定遺一五一九)△真▽・千日尼御前御返事(定遺一五四四)△真▽等である。
- (40) 宮崎英修氏は(『日蓮宗の守護神』八六〜九〇)四つに区分されるという。すなわち、(1)悪国拋棄・・・守護国家論(定遺一一七)△會▽・災難対治鈔(定遺一六五・一六八)△真▽・立正安国論(定遺二〇九〜二一〇・二二三・二二七)△真▽・南条兵衛七郎殿御書(定遺三二二)△真▽・日興写本▽・安国論御勅由來(定遺四二三)△真▽・開目抄(定遺五四二・五五九)△會▽・富木殿御返事(定遺六一九)△真▽・観心本尊抄(定遺七一九)△真▽・願仏未來記(定遺七四〇)△會▽・日進写本▽・下山御消息(定遺一三三〇・一三三五・一三三九)△真▽・日法・日澄写本▽・兵衛志波殿御返事(定遺一四〇二)△真▽
- (41) 他国移住・・・曾谷入道殿許御書(定遺九〇三)△真▽・會▽い還帰本土・・・報恩抄(定遺一二三二)△真▽・會▽・日舜・日乾写本▽・智妙房御返事(定遺一八二七)△真▽・諫曉八幡抄(定遺一八四九)△真▽・會▽(2)無力無為・・・富木殿御返事(定遺六一九)△真▽・四信五品抄(定遺一二九九)△真▽・断簡二三三(定遺二八八九)△真▽である。
- (42) 自界叛逆逆難のみを記した遺文はなく、これについての理論は十分ではない。なお、前掲岩波思想大系の補注(自界叛逆逆難・他国侵逼難)を参照されたい。
- (43) 定遺九五五△會・真▽
- (44) 同九六三△會▽
- (45) 同八八六△真▽
- (46) 同一〇四七・一〇五五△真▽
- (47) 同四五四△真▽
- (48) 同一二二四△真▽・會▽・日舜・日乾写本▽
- (49) 聖人知三世事(定遺八四三)△真▽・種々御振舞御書(定遺九六一)△會▽・一谷入道御書(定遺九九六)△真▽・撰時抄

- (定遺一〇〇七・一〇〇八) △真▽・三藏祈雨事(定遺一〇七二) △真▽・清澄寺大衆中(定遺一二三四) △曾▽・現世無
 間御書(定遺一二九二) △真▽・下山御消息(定遺一三三五) △真・日法・日澄写本▽・千日尼御前御返事(定遺一五四四)
 △真▽・断簡一二七(定遺二五一六) △真▽
 (49) 定遺一〇〇〇△真▽
 (50) 同一七六△真▽
 (51) 同六〇一△曾▽
 (52) 定遺一八四九△真・曾▽
 (53) 同八八二△真▽
 (54) 聖人御難事(定遺一六七三) △真▽
 (55) 定遺一三二九△真・日法・日澄写本▽
 (56) 同五六七△曾▽
 (57) 同七一九△真▽
 (58) 同四五五△真▽
 (59) 宮崎英修氏前掲著(八九〇九)と(九六〇九七)参照。なお、「氏神八幡大菩薩」・「日蓮の氏神を諫曉する云云」(定遺一八四四)という表現がある。
 (60) 種々御振舞御書(定遺九六五) △曾▽
 (61) 史料綜覧二五三
 (62) 諫曉八幡抄(定遺一八四九) △真・曾▽
 (63) 定遺五五二△曾▽
 (64) 岩波法華経下一六
 (65) 同三二
 (66) 同一八
 (67) 定遺一六二三△曾▽、他に開目抄(定遺五七一・五七六・五七八)△曾▽・法華取要抄(定遺八二二)△真・曾・日興写本▽
 ・聖密房御書(定遺八二四) △曾▽・諫曉八幡抄(定遺一八四九) △真・曾▽とがあげられる。
 (68) なお、註には列記しなかったが、立正大学名誉教授影山晃雄博士の大学院における「宗史特講」の講義ノートから、その考え方を随所に引用させて頂いたことを付記して、謝意を表する。
 ◇真蹟の存するものは△真▽、曾って存したものは△曾▽、写本は古写本を用い例えば△日興写本▽のように書写した者の名を冠する。